

改革フォーラム 松崎百合子 研修報告書

研修先	フェミニスト議員連盟 サマーセミナー in 松本
日時	2018年7月7日 13時30分 ～ 8日12時
場所	松本市Mウイング 3Fパレオ松本女性センター
テーマ	三ガク（岳・楽・学）都からの発信—生命を考える—
対応者 （講師）	菅谷昭（松本市長・チェルノブイリで医師として治療にあたる） 伊佐治裕子（松本市子ども部 部長） 八田桂子（福祉施設役員） 小枝すみ子（千代田区議会議員） 尻無浜博幸（松本大学教授） 青木直美（松本市子ども部子ども育成課 課長） 伊藤由紀子さん（居場所づくり ワーカーズコープ所長）
概要	<p>1. 基調講演 「原子力災害による子どもの健康と人権への影響」 —チェルノブイリ原発事故医療支援の経験を通して—</p> <p>菅谷昭松本市長は、甲状腺疾患・ガンの専門医師であり、信州大学医学部や長野県衛生部等に勤務後、2004年から松本市長を務め4期目である。</p> <p>1986年4月26日、ソビエト連邦（現：ウクライナ）のチェルノブイリ原子力発電所4号炉の原子力事故は起きた。菅谷市長は、1991年ミンスク市の国立甲状腺がんセンターへ行き、子どもたちの治療にあたった。1995年から2001年まで5年半は、信州大学を退職し、ミンスクがんセンターを中心に、ベラルーシ共和国にて医療・支援活動を行った。</p> <p>菅谷市長は、甲状腺がん専門家として、超音波検査機をもって現地で、手術にて主に子どもたちの治療を行った。子どもたちの甲状腺がんは通常年に一人いるかないかだが、ミンスクでは甲状腺がんの子どもたちがいっぱいだった。子どもたちが写真を撮るとき「笑って」といっても笑わなかった。</p> <p>福島では、1年くらいから子どもたちの甲状腺がんが発症している。放射能による甲状腺がんは、チェルノブイリの事例から5年後から発症するとされている。そのため、福島の子どもの甲状腺がんが、原発事故の影響とは政府も医療界も認めない。</p> <p>しかし、菅谷市長が事故の5年後に超音波検査機をもっていき、子どもたちの甲状腺がんを診断したが、最初から超音波検査ができていたら、早くから、福島のように甲状腺がんが表面化したのではないか。</p> <p>2016年7月初旬、事故後30年にもチェルノブイリ訪問。チェルノブイリでは、現在も30KM以内は居住禁止。350KMくらいまで汚染される。セシウムは半減期が30年。除染してもすぐに汚染する。</p> <p>NPOチェルノブイリの子どもたちを救う会は当時の子どもたちとの再会をセットした。12歳で手術したターニャは母になっていた。ターニャは2歳の時、母がおんぶしているときに被ばく。医師になりたいと医学部に入ったが、疲れがひどくついていけなか</p>

った。カーチャは看護師となり、2歳と0歳の2児の母になっていた。今、甲状腺がん
で苦しむ福島の子どもたちにも夢を持ってほしい。

ゴメリ州（人口50万人）の保健局によれば、18%が健康で、他は不調。免疫機能の低
下、アレルギー疾患、胎児異常の増加など。低線度被ばくの影響か。国際放射線防護委
員会等は、100mSV（ミリシーベルト）以下でも必ず危険を伴うと認めているという。

チェルノブイリの子どもたちの苦痛は、健康に生きる権利の侵害であり、虐待といえ
る。放射能は、見えないしにおいもない。子どもたちを守るのが大人の責任。

チェルノブイリから32年経過した今もなお収束したとはいいがたい。福島事故からは
7年、国に期待が持てない以上、国民一人ひとりに子どもたちの健康を守る責任があ
る。

画像（略）

2. シンポジウム 女性の活躍！女性の視点で未来を切り開く

—仕事・子育て・介護等の現状から考える—

<伊佐治こども部長>

12年ぶりの女性部長。管理職は146名中11名7.5%、庁議出席者では29名中2名が女
性。

女性の活躍のためには、母親ばかりに負担がかからないように、子育てを一番に！と
父親参加やワークライフバランスを進める。

菅谷市政H16年度～3K（健康づくり、子育て支援、危機管理）政策と子ども重視。松
本市の子ども施策は、子育て支援＋子ども支援（すべての子どもにやさしい街づくり）。

H25年4月「子ども権利条例」制定。市では、子ども貧困を、成育環境の悪化（家庭
の養育力の低下など）に伴い、子どもの権利侵害が発生する恐れのある状態、と広く捉
え、居場所づくりなど施策を行う。児童館・児童センターは27か所。放課後児童健全育
成事業は、公設29か所、民間13か所など。

<八田桂子氏>

介護保険制度始まって間もないH14年、営利法人として松本市初の認知症対応型グルー
プホーム園運営会社に入社。子育てと親の介護、自分の働き方を通じて、短時間勤務や
産休・育休・介護休暇の取れる環境、子連れ・親連れ勤務など女性の働きやすい職場環
境を作ってきた。大学等での福祉の専門家を育てる教育、人材育成も関わる。

<小枝すみ子>

1991年27歳で千代田区議に初当選。7期目。議員になって2人出産。「フェミニスト議員連盟」「景住ネット」「産休ネット」「出産議員ネット」等結成から参加。

現在は、若い女性が社会運動する機会がない。メディアの女性達の活躍が希望。次世代女性たちががんばろうとしているところを応援し、政策決定の場の4割が女性となるよう送りたい。

画像（略）

3、分科会 「子どもの人権と居場所づくり」

<尻無浜> 松本市には「平和推進課」がある。戦争が起こると悲惨な状況になることを放置しては、市民の福祉にならないから。今と未来を生きる若者が平和に取り組まなくてどうするんだ、と市長の信念でもあり、子どもの権利と福祉にも通じる。

<青木> H23年「松本市子どもの権利に関する条例検討委員会」、H25年4月条例施行、H27年3月「すべての子どもにやさしいまちづくり推進計画」策定。

条例に基づき、①子どもの権利の普及と学習への支援 ②子どもにやさしいまちづくり、③子どもの生活の場での権利保障と子ども支援者の支援、④相談・救済制度の充実等を推進している。

<伊藤> 松本モデル「なみカフェ」からの報告—寄り添うだけで子どもは育つ。

優先入居の公営住宅の400戸くらいの地域。家庭の文化が崩壊している中で、子どもの危機が顕在化している状況。①コミュニケーション力の低さ、②自己肯定感の低さ、③集中力の低さ。⇒地域に居場所を作る。夏休み：10-14時 水曜：16-19時。定員15人、8割が小学生。スタッフ1名、学生ボランティア1~3名。遊び・食事・活動。

効果：①傍に大人が寄り添うだけで自ら学び始める。②みんなで食べる。③遊んで心にある不安を吐き出す。④落ち着きと意欲につながっている。

所 感

菅谷松本市長の講演に終始胸を打たれた。医師として、人間として、子どもたちへの深い思い。甲状腺がんの専門家である菅谷市長がチェルノブイリに行かれたことに天の力を感じる。日本全国からも多くの市民がチェルノブイリを訪れ、チェルノブイリの子どもたちを保養のために招待してきた。市民の力に希望がある。私たちは今、福島に直面している。松本市や糸島市、沖縄久米島、全国の各地で夏休み等に、福島の子どもたちを招いて保養プログラムが行われている。放射線は低くても危険がある中で日々生活している子どもたちが、一時的にでも被爆地を離れて「保養」することは、健康回復に効果があるという。本市でも、市と市民の協力で保養プロジェクトができないだろうか。原発を建設、再稼働させない、廃止と同時に、子どもたちへの支援を改めて痛感した。あらゆる分野に女性が平等参画、子どもたちに居場所が必要なこと、最高の研修で、パワーをいただいた。これからの活動に活かしたい。—作成者 松崎百合子—